

序文 日本の言語景観：西欧化、国際化、そして多民族化

著者	庄司 博史
ページ	9-15
発行年	2009-03-30
URL	http://hdl.handle.net/10502/4356

序文

日本の言語景観

— 西欧化、国際化、そして多民族化

編者

「言語景観」という概念は、公共空間で目にする書き言葉を指している。これに相当する英語の「linguistic landscape」は、カナダの社会言語学者R. LandryとR.Y. Bourhis (1997: 25) が「特定の領域あるいは地域の公共的・商業的表示における言語の可視性と顕著性」と定義している。近年では社会言語学に定着しつつある分野で、特に2000年代に入ってから、さまざまな研究が世界中で行われてきた。

日本の言語景観も、ここ数年でいくつかの調査の対象となってきたが、実はそれよりはるか以前からの長い歴史がある。街の表示に関する研究の原点は、地理学者の正井泰夫が1962年に実施した「新宿の都市言語景観」という調査であろう（正井1972: 153-158）。調査の対象は店名看板で、それを言語、文字、そして業種により分析した。正井によると、当時の新宿はまるで外国語のあふれた街で、「知らない外人が見たら、外人がたくさん新宿を利用するのか、それとも日本が『植民地』だからだと思うかもしれない」と訴えている。それを証明するため添えられた写真もあるが、この写真を見ると、1960年代の日本の言語景観は、現状と比べて、実はきわめて同質的なものであったことがわかる。「ホニークラブ」や「コメット」などのカタカナ外来語も数少ないながら確かにあるが、漢字とひらがなの可視性は圧倒的に強く、ローマ字の看板は「TEA FOR TWO」という一例しか見られない（正井1972: 153-154）。

店名看板の研究は、正井の先駆的な調査以降も続き、正井（1983）、宮島（1995: 14-19）、林（1996）、染谷（2002）、MacGregor（2003）、佐藤（2003）、オバタ・ライマン（2005）、Backhaus（2007）などがある。データの採集方法はそれぞれに異なる点が多いため、直接の比較は控えたほうが良いとも思われるが、それらの調査を全体

として見ると、英語やその他の西洋言語がいかに日本の言語景観において可視性を増してきたかは想像がつく。これは言語景観の「西欧化」ということができよう。

1980年代に入ってから、日本の言語景観にもう一つの現象が見られるようになった。それは、上述の、明らかに日本人を対象とした装飾的な外国語使用と違って、当時から着々と増加してきた外国人のための多言語表示の出現である。その多くが国、自治体、交通機関などによって設置された、いわゆる「言語サービス」(平野 1996、河原 2004、日比野 2005)にあたいするものである。例として道路標識、街区表示板、地下鉄案内板、避難標識などをあげることができる。採用される言語は、最初から英語とローマ字表記の日本語が中心であり、結果としては、ローマ字と英語の可視性が公的表示にも及んでいる。近年では、それに中国語と韓国・朝鮮語が加わり、場合によっては点字も提供されるようになった。関連する文献では、バックハウス (2004: 46-51)、糸魚川 (2006)、庄司 (2006)、佐藤・布尾・山下 (2006)、田中 (2007)、河原・野山 (2007)、藤井・衛藤・永射 (2008) などがある。このような発展傾向は全体として、言語景観の「国際化」と呼ぶことにしたい。

日本の言語景観に関して注目すべき3つ目の点は、日本に在住する外国人が主にコミュニティ内の情報交換のために掲げる表示である。東京の場合では、コリアンタウンに変貌しつつある新大久保の例がもっとも著しいが、大阪生野区に根を下ろした在日韓国・朝鮮人コミュニティ、または日系人が集住する関東や東海の産業都市など、外国人住民が言語景観を形成する例は、全国にいくつか考えられる(金 2003、金 2004、庄司 2006: 19-24、65-71)。その発展は言語景観の「多民族化」と名づけられる。

日本の言語景観は多岐にわたる現象で、言語と社会との複雑な関わりをいくつか可視化するものである。上述の「西欧化」、「国際化」、そして「多民族化」はその中でもっとも顕著な3つの要素であろうが、先行研究では、主に第1の「西欧化」と近年では第2の「国際化」が観察の対象となっていた。本書は、それに加えて「多民族化」の観点も含めた3つの要素を巡って日本の言語景観を探るものであるともいえる。

本書は、理論篇と実態研究篇の2部で構成されている。前者は、言語景観を歴史的、共時的観点から、さらに経済活動との関連から、その本質を理論的総合的にと

らえるためのいくつかの視点を提供する。後者は、現在の日本の言語景観の実態を上あげたような視点からより深く掘り下げようとする論考で、調査対象を特定の地域、あるいは表示媒体に限定し、収集したデータにもとづく実証的な研究であるといえる。

第1部の理論篇の第1章の「多言語化と言語景観」では、庄司が言語景観を日本の多言語化の一つの指標としてみなそうとする。まず多言語性、多言語化についての概念を考察するが、今日の多言語化についての論議では、都市においてホストと移民の言語によって構成される重層的な多言語使用という状況を重視する。さらに、多言語化にかかわる重要な要素として、ホスト社会が少数言語（ここでは移民言語）の存在に対しいかなる態度をとるかということがある。論文では、この観点から、現在日本で共時的にみられるさまざまな多言語表示を発信者別に分類し、多言語化といかにかかわっているか明らかにしようとする。その結果、私的な多言語表示が、多様な形で顕在化しつつある一方で、公的な表示も、いわゆる国際化に沿った形で多言語化されるなか、日本の多民族化に連動した現象も多くの点で観察されることを明らかにした。

次の「経済言語学からみた言語景観」では、井上が日本の言語景観の歴史的な変遷をおもに経済原理とのかかわりから説明を試み、言語景観を支配する背後の原理を探ることを目標とする。まず文字使用について、近代の表記を、①漢字優勢タイプ、②カタカナ優勢タイプ、③アルファベット優勢タイプ、④アルファベットプラス優勢タイプの4段階に判別する。そして戦後の看板の文字使用の変化をみると、漢字からカタカナへ、さらにアルファベットへの傾斜があるとす。さらに、アルファベット以外の民族文字の出現もみられるようになったが、これは世界の言語や文字を相対的にとらえ経済効果を重視し始めているためであるとする。加えて、言語そのものの使用では、商業施設を中心に、日本語のほかは、英語、フランス語など大部分がヨーロッパ諸言語であり、日本の西欧化を象徴するものである。しかし日本のデパートの多言語表示は、この16年の間に、外国語1.4言語から2.1言語へと増え、中国語、韓国・朝鮮語の表示も増えている。これは商業施設の言語景観には、経済原理が反映されやすいためである。しかし自治体の言語サービスのように景観として現れにくい分野では、住民（ニューカマー）の便宜を配慮した、経済原理に基づかない言語選択が見られることを指摘する。

第3章の「言語景観と公共圏の起源」において、クルマスは今日、関心の対象となり始めた言語景観は、すでに古代において「書く」という行為とともに出現していたものにとらえる。あたらしいのは言語景観という現象ではなく、むしろそれに対する視点にこそあるとする。この立場から、彼は言語景観の本質を正しくとらえるために、古代の言語景観を構成したいくつかの歴史的遺物、碑文に焦点をおき、それらにおいて、今日言語景観とみなされるものの特徴がすでに存在していたことを明らかにする。取り上げる対象はハムラビ法典、ロゼッタ・ストーン、メネテケル、タジマハールである。これらに関する考察の中でクルマスは公的な場における言語記号は、だれがその記号（言語）を読む能力を持つか、そしてだれがそれを実際に読むのかということを常に想定しながら、公的権力であれ、それに抗する力であれ、その意図するところを主張しようとするものであるという。そして、それをあきらかにすることが言語景観研究であると結論づける。

第2部の実態研究篇では、まず染谷が「言語景観の中の看板表記とその地域差」に関して論じる。染谷は小田急線の2つの駅周辺において、店名看板に用いられる文字の種類や地域的な差について、調査をもとに考察する。一方は、商業ビルを中心とした新しい街「新百合ヶ丘」、他方は昔ながらの商店街ののこる「生田」である。まず用いられる文字の種類は、生田においては、圧倒的に漢字表記が優勢である。一方の新百合ヶ丘ではアルファベットが優勢になり、ファッション関係の多いビルほどさらに増えるという傾向が観察される。続いておこなった文字種の組み合わせに関する分析では、生田では2種の文字を組み合わせたものが多いのに対し、新百合ヶ丘では単独文字種（アルファベット）が最も多い。店名に限ると、前者は漢字単独表記が多く、後者ではほぼ半数がアルファベット表記という結果を示す。とはいえ、後者においても商業ビルの各階エスカレーター付近の見取り図ではカタカナ表記でひっそりと記してあったり、駅正面から離れ住宅地に近づくビルほど、アルファベット表記は減っていくという現象もあり、アルファベット優勢の状況は、必ずしも日本人の日常生活と結びついたものではないと指摘する。生田においては漢字を中心として日本語表記が主流を占めるが、外国語のアルファベットを併記するケースも存在し、その情的価値を生かそうとする傾向もみられる。

佐渡島他の論文「地下鉄案内板にみるローマ字表記法の幅」は、筆者たちが1999年東京の地下鉄における表示を対象におこなった調査の結果についての報告

である。資料の分析では、「通り」「神社」「～丁目」等7つのことばを選び、それに対応するローマ字表記のバリエーション（ゆれ）の類型化をおこなった。その結果、ゆれを生じさせる原因として、①日本語とローマ字表記の提供する情報の違い、②ローマ字が意味を表示するか、音を表示するか、③ローマ字表記に用いられる訳語の違い、④ローマ字で音を表示する場合の表記法の違い、が明らかになった。以上をふまえて、日本語表示に対応する「音」と「意味」の双方をローマ字で表示することを提言する。

佐渡島他の論文が暗示するように、1999年当時に地下鉄案内板などの公的表示では英語以外の外国語がまだほとんど使用されていなかった。それに関する近年の変化がバックハウスの論文「日本の言語景観の行政的背景」のテーマである。東京を事例に、本論の前半では公的な多言語表示に影響をあたえたとみられる指針を国、都、区により策定されたマニュアル、ガイドラインからたどる。それによれば、英語併記、ピクトグラムの使用に関してはすでに1991年から奨励され、英語以外の言語の表示に関しては2002年、2003年のガイドを機に言及され始めている。これを踏まえ、後半では、都、区の公的表示の多言語化がいかに実現されてきたか、標識の類型別、23区別、言語別に分析をおこなっている。その結果、東京においては、英語に加え、近年普及した中国語、韓国・朝鮮語の公的表示の背景には行政諸機関の表示に関する指針が大きく影響を与えていることが実証された。

言語景観は一般には公的空間において人々が授受している可視的な言語情報、つまり墨字情報と理解されている。しかし視覚障害者にとっては、可視的な言語景観は情報源とはなりえない。とはいえ、視覚障害者が公共空間において情報を受け取っていないわけではなく、目的地へ危険を回避しながら到達するためのさまざまな情報を活用している。そのひとつが鉄道駅のプラットフォームへの階段手すりに設置された点字による案内である。山城の論文「視覚障害者にとっての言語景観」は鉄道で移動する視覚障害者にとって今日きわめて重要な階段手すりの点字案内の現状に関して、東京山手線全駅において1999年より実施した調査にもとづく報告である。報告の中では、点字の不在、判読困難、点字位置の問題、内容のあやまりなど約40%に何らかの問題があったことが指摘されている。この結果は2000年11月公表され、行政や鉄道関係者に対し、点字表示の重要性についての強いメッセージとなったといわれる。

最後の「言語景観における移民言語のあらわれかた」で、金はコリアンコミュニティに研究対象を特化し、彼らの言語活動と言語表示を通して日本の多言語・多民族化を探ろうとする。在日コリアンが集住する東京新宿区新大久保近辺、大阪市生野区という2つの地域を対比しながら、オールドカマー、ニューカマーの来日の経緯と言語意識とのかかわりから現在の言語使用状況を明らかにし、言語景観に可視化されるコリアンの存在を概観する。

さらに近年、公共空間で、ハングル表記が特に顕在化している要因を分析し、在日韓国人の増加、韓国人観光客の増加、韓国大衆文化の流行をあげ、実用性とともなう装飾としても用いられるようになった韓国語の経済価値の上昇や多民族化にともなう日本社会の意識の変化を指摘する。金が本論文で特に注目するのは、韓国料理名などカタカナで表示される韓国語である。その文字と言語のずれに、すでに二世において日本語への言語移行をとげたオールドカマーの言語状況と韓国的文化や故郷を連想させる語への郷愁と韓国語の音感を保全しようとする意図が読み取れる。また韓国語のカタカナ表記において両言語の音韻体系、表記法の違いを克服しようとする試みが見られることも指摘している。

上記のように、本書は日本の言語景観を多様な角度から考察することによって、変わりつつある日本社会の言語的状況を理解しようとしている。全体として、われわれが日々接する公共空間における書き言葉に関心がもたれ、また言語景観という新しい分野を日本の社会言語学の一部として確立することに貢献できれば幸いである。

参考文献

- 糸魚川美樹 (2006) 「公共圏における多言語化—愛知県の事例を中心に—」『社会言語学』VI、pp.45-59
- オバク・ライマン、エツコ (2005) 「表記法から観察するビジネス・アイデンティティ—表参道商店街の店名 (1)」『麗澤学際ジャーナル』13 (1)、pp.39-67
- 河原俊昭 (編) (2004) 『地方自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』春風社
- 河原俊昭・野山広 (編) (2007) 『外国人住民への言語サービス：地域社会・自治体は多言語社会をどう迎えるか』明石書店
- 金美善 (2003) 「言語景観からみた日本の多民族化」庄司博史・三島禎子 (編) 『国際移民の自存戦略とトランスナショナル・ネットワークの文化人類学的研究』国立民族学博物館、pp.175-190

- 金美善 (2004) 「日本社会との共生めざす新来韓国人」庄司博史 (編) 『多みんぞくニホン—在日外国人の暮らし』国立民族学博物館、pp.75-79
- 佐藤桂子 (2003) 「看板の文字」『山形方言』35、pp.1-21
- 佐藤誠子・布尾勝一郎・山下仁 (2006) 「大阪における多言語表示の実態—まちかど多言語表示調査、外国人へのアンケート調査、行政・鉄道へのインタビュー調査から—」津田葵・真田信治 (編) 『言語の接触と混合—共生を拓く日本社会』大阪大学21世紀COEプログラム「インターフェースの人文学」、pp.105-146
- 庄司博史 (編) (2006) 『まちかど多言語表示調査報告書』多言語化現象研究会
- 染谷裕子 (2002) 「看板の文字表記」飛田良文・佐藤武義 (編) 『現代日本語講座 第6巻 文字・表記』明治書院、pp.221-243
- 田中ゆかり (編) (2007) 『山手線の多言語状況』日本大学文理学部国文学科
- バックハウス、ペート (2004) 「内なる国際化：東京都の言語サービス」河原俊昭 (編) 『自治体の言語サービス：多言語社会への扉をひらく』春風社、pp.37-53
- 日比野純一 (2005) 「外国語表示」真田信治・庄司博史 (編) 『日本の多言語社会』岩波、pp.63-65
- 平野桂介 (1996) 「言語政策としての多言語サービス」『日本語学』15 (13)、pp.65-72
- 藤井久美子・衛藤利絵・永射紀子 (2008) 「宮崎市周辺の多言語表示について—居住と観光の観点から—」『宮崎大学教育文化学部紀要 人文科学』19、pp.13-38
- 正井泰夫 (1972) 『東京の生活地図』時事通信社
- 正井泰夫 (1983) 「新宿の喫茶店名—言語景観の文化地理」『筑波大学地域研究』1、pp.49-61
- 宮島達夫 (1995) 「多言語社会への対応—大阪：1994年」『阪大日本語研究』7、pp.1-21
- 林英熙 (1996) 『韓日多言語表記の研究』東京外国語大学修士論文 (平成8年度)
- Backhaus, Peter (2007) *Alphabet ante portas: How English text invades Japanese public space. Visible Language* 41 (1), 70-87.
- Landry, Rodrigue & Bourhis, Richard Y. (1997) Linguistic landscape and ethnolinguistic vitality: An empirical study. *Journal of Language and Social Psychology* 16, 23-49.
- MacGregor, Laura (2003) The language of shop signs in Tokyo. *English Today* 19 (1), 18-23.